

## 姥が穴

## たつの市誉田町

ここは城内、広い庭に面した奥座敷、春の夜の月はおぼろに霞すんで見える。

部屋には灯も入れず、月あかりに浮かんで見える人影は、竜野城主とその城主を育てた乳母である。

二人は、家来も遠ざけ誰れ、はばかり事なく、ひぎを近よせ語り合っていた。

乳母よ、そちとこうして月を眺める花を賞でるのも今宵かぎり寂しくなるのう……

昔から生みの親より育ての親とは、良く言ったものよ。乳母と別れるのは身を切られるよりも辛いぞ。しかし、断つての願いとあればこれ以上引き止めることも出来まい。

その言葉には、哀しみが秘められていた。

殿様は、更にひぎを進めて乳母の手を取り在所へ帰っても暑さ、寒さにずいぶんと体をいたわり達者で暮らせよ。そして、ときどきは、余を尋ねて達者な顔を見せて呉れ、余はその日を楽しみに待っているぞ。と殿様は乳母に頭を下げて頼むのであった。

何時迄も余のそばに居て呉れという殿様の言葉を振り切って、宿下りする乳母は、もったいないお殿様、私のような貧しい百姓女

にそのお言葉は身に余り、家門の誉、身の誉  
で御座居ます。

明日、在所へ帰るこの乳母にとって何よりの  
土産で御座居ます。

殿様はこの言葉で思い出したように、うっ  
かりしていた許せ、その土産の事じゃ。乳母  
よ、欲しいものは何んなりと言って呉れ望の  
品を、余とそちの仲に何んの遠慮がいるもの  
か……米か金かそれとも田畑がよい  
のか……頭を下げている乳母は、溢  
れる涙をぬぐいもせずに顔を上げ強い言葉で  
お米もお金も田んぼも畑もいりません。  
こうして立派に成人されたこのお姿を、乳母  
はこの胸に抱いて先刻頂いたお言葉をお土産

に致します。乳母はこれ以上に何を望みま  
しょう。

この言葉に殿様はよけいにふびんがかかり、  
親にせがむ子供のようになり、乳母よ、それでは  
この、わしの気が済まぬ。言っただけ、うん  
と無理な、ことを。

殿様より重ねての言葉に決心したか、  
それではお言葉にあまえて、この乳母に一生  
のお願いが御座居ます。どうぞお聞き下さ  
い。乳母の生れ育った在所は片吹（竜野市  
誉田町）という貧しい村でございます。

この村は、毎年のように水が不足して田植  
どきには村中が夜も眠らず少しの水を分け合  
って田んぼに入れ、やっと田植を済ませます。

しかしこのあと、稲を養う水が足りなくて外の村より何倍も苦勞しながらとれるお米は少なくそのお米も全部年貢米となつて、お城に差し上げますと村人は食べるお米もなく、粟や、ひえを食べ、冬になると男は出かせぎ、村に残つた年寄、女、子供は夜遅く迄、藁仕事に精を出し、やっとその日の生活をしております。

これも、もとをと言えば、田んぼに入れる水がないからです。

片吹へくる水は、揖保川の浦上堰の溝からくる一番末のちよるちよる水です。

この浦上堰の上流に岩見堰があります。

この二ツの堰が接近してありますから、川を

せき止めても水の溜りが悪く、これに比べて岩見堰では揖保川の水だけでなく栗栖川の水をごせが瀬でせき止め中洲を掘割り水を通し、この水も岩見堰で受けますから、どんなに日照りが続いてても岩見堰の溝には水が一杯になつて流れています。

乳母のお願いと申しますのは、片吹の村のすぐ北をこの岩見堰の溝が通っています。

この溝に穴を開け、溝を掘つて浦上堰の溝につないで頂けたら片吹の村は水に不自由することなく田植が出来ます。

又、稲を養う水にも困りません。

従つて、お米も沢山とれるようになり、片吹の人々はどんなに喜ぶでしょう。

あす  
明日からの自分の生活を考えず、村を思う  
この乳母の一念にこもった願いに殿様はいた  
く感動して、夜分ながらこのおねを早速奉行  
に命じました。

この話は今も広く語り伝えられ片吹の人々  
は、乳母の功績を称えた碑を建て、毎年、  
田植前に回向を行っている。



姥堰之碑（たつの市菅田町片吹）